

2016年1月8日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一五年十二月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年3月号初出の二作品を読みました。

「角兵衛獅子」、 「ピアノ」（「夜長物語」所収）

「角兵衛獅子」・・・森三郎

『赤い鳥』昭和9年3月号の「講話通信」の中で、鈴木三重吉は「角兵衛獅子」のことを、同じ号に掲載された坪田譲治の「芋」とともに「それぞれの意味で傑れた作篇」だと評価しています。どちらも少年たちの日常をそのまま切り取ったような作品です。

「角兵衛獅子」の主人公・小学校五年生の修一は、友達二人と一緒に、村はずれの観音山へ宿題の図画を描きに行きます。山の上で角兵衛獅子の二人の男の子に出会いました。初めは友だちの順ちゃんが、持っていた金柑をやるよと話しかけていたのに、口達者な角兵衛獅子の子に言い負かされます。修一は「修ちゃんてば、だまっで一と言も言わないんだもの。」と順ちゃんに言われますが、にっこり微笑んでいるだけです。さんざんにすられてああ言えばこう言う角兵衛獅子の子を、嫌なやつだなとは思いますが、修一には、その境遇に対して「かわいそうだな」という思いがあったから、一緒になつてからかうような気持にはなれなかったのでしょうか。風邪を引いて長く休んでいた後で、先生や友達からやさしく心配してもらいうれしく思っていた自分の身と、引き比べていたかもしれせん。

『赤い鳥』昭和9年2月号の「風船虫」の軽業小屋の子どもに引き続いて角兵衛獅子の子どもを取り上げたことは、不安定な社会情勢の中で子供たちにもその影響が出ていることに対して、森三郎さんがつらく思っていることをそのまま表しているのかもしれない。

「ピアノ」：米川茂子（この作品も少女の心理を描くのに女性名義を使用しています。参照「かささぎ」通信第38号）

この作品は、主人公が尋常四年の冬に学校にみえた、若い唱歌専門の吉川先生との思い出を語る作品です。先生は東京の音楽学校にいたのをやめて、実家に戻ってきていたのです。

「色のお白い背のすりとした、紫の袴のよくお似合いになる方でソプラノのお声がきれいでした。」と、「わたし」は述懐しています。東京の人に対する憧れというとすぐに思い出すのは、『赤い鳥』昭和8年6月号の「あのころ」です。五年生の時に東京から来た転校生にまつわる思い出を描いた作品です。「東京の子は、言葉もはきはきして、きれいですし、身なりや、からだのこなしも、垢ぬけがしている・・・」「丸顔の、目のきれいな、小柄な子でした。」と紹介していました。（参照「かささぎ通信」第31号）

吉川先生は隣村のお医者さんの娘さんで、去年お嫁に行った「わたし」の姉の女学校の時の友だちでした。そんな縁があつてか、「わたし」がピアノの鍵盤の上に拍節器（メトロノーム）を落としてしまったとき、「わたし」をかばってくれたのです。

吉川先生は、次の春には学校をやめて、「朝鮮へお嫁においでなさいました。」と、書かれています。「あれからもう五年」というので、昭和初期を想定してみると、一九一〇年段階で一七万人台だった朝日本人は一九三〇年には五二万人台にまで増えていたようです。吉川先生の結婚相手が、軍人なのか、役人なのか、他の職業なのか具体的なことはわかりませんが、森三郎さんは「朝鮮へお嫁においでなさいました。」の一文だけで当時の世相を描いているのですね。

次回予定 平成28年2月12日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和9年5月号初出作品

「松ぼっくり」、「鯉のぼり」